

山岳気象遭難の真実 — 過去と未来を繋いで遭難事故をなくす—

デンソー山岳部 大矢 康裕 (著), 吉野 純 (監修)ヤマケイ新書, 2021/9/11
発売予定,

<https://www.yama-kei.co.jp/products/2821510750.html>

ISBN 978-4635510752 爆弾低気圧、豪雨、落雷、異常高温、台風、豪雪など。

最新の知見に基づいて気象遭難を引き起こす背景を探り、事故を防ぐ手立てを考察。決して埋もれさせてはならない過去の遭難事故の教訓、将来も風化させてはならない近年の重大な遭難事故の教訓、そして将来の気候リスク。ヤマケイオンラインで「山岳防災気象予報士・大矢康裕が教える山の天気のエロハ」を連載中の著者が「遭難をなくす!」という思いを込めて、すべての登山者におくる一冊。

第1章 怖い爆弾低気圧

爆弾低気圧が引き起こす疑似好天/事例 2009年4月・北アルプス鳴沢岳遭難事故/どうすれば防ぐことができたのか

将来の気候変動によって爆弾低気圧はどうなるのか

第2章 山岳を襲う豪雨

梅雨についてもっとよく知っておこう/大雨になった時に山ではどのようなリスクがあるのか

事例 1 2004年7月・奥只見山系白戸川遭難事故/事例 2 2017年6月・屋久島での遭難事故

将来の気候変動によって梅雨の大雨はどうなるのか

第3章 落雷リスクは増える

雷についてもっとよく知っておこう/知っておくべき雷の知識/事例 1 1967年8月・西穂高岳落雷遭難事故

事例 2 2012年8月・槍ヶ岳落雷遭難事故/将来の気候変動によって雷はどうなるのか

第4章 異常高温に警戒

夏の暑さと熱中症対策/熱中症についてもよく知っておこう/事例 1 1994年7月・朝日連峰遭難事故

事例 2 2020年8月・羊蹄山遭難事故/将来の気候変動によって夏の猛暑はどうなるのか

第5章 夏でも起きる低体温症

山では致命傷に繋がる低体温症/事例 1 1918年8月・木曾駒ヶ岳『聖職の碑』遭難事故

事例 2 2009年7月・トムラウシ山遭難事故/将来の気候変動によって低体温症のリスクはどうなるのか

第6章 関東甲信や北日本を襲う台風

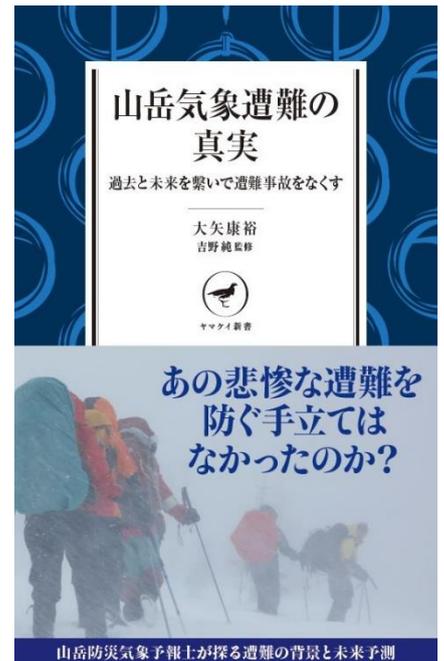
なくならない台風による遭難事故/事例 1 2002年7月・トムラウシ山遭難事故/事例 2 2018年7月末・富士山遭難事故

将来の気候変動によって台風はどうなるのか

第7章 中部山岳北部を襲う豪雪

日本海側の雪についてもっとよく知っておこう/大雪になったときにどのようなリスクがあるのか/事例 1 1963年1月・薬師岳遭難事故

事例 2 2004年2月・大長山遭難事故/将来の気候変動によって雪はどうなるのか



<以下、著者の大矢様からあとがきも送って頂けました。大矢様の熱意にあふれる思いだけでなく、この本の価値を裏付けています。>

あとがき

本書を結ぶにあたり、山岳防災活動や山岳気象研究などの、これまでの様々な取り組みの中で、お世話になった方々への感謝の言葉を述べたいと思います。日本山岳会東海支部の方々には冬山気象講座などでお世話になりました。所属する愛知県山岳連盟、全豊田山岳連盟、デンソー山岳部の方々には、気象遭難対策講習会、気象講座、岳連ニュースなどでお世話になり、本書の遭難事例でいくつか取り上げています。

登山家で甲斐駒ヶ岳七丈小屋管理人の花谷泰広さんには、「令和元年東日本台風」で崩壊した登山道の写真をご提供いただきましてありがとうございました。これからも色々と情報交換させていただきたく思います。東京の落雷の写真をご提供いただいた柳田文華さんにも感謝いたします。判断ミスが多くの人命を奪うことを改めて痛感させていただいた「東日本大震災」のご遺族の方々にも感謝申し上げます。石巻市立大川小学校の佐藤敏郎先生、日和幼稚園の佐藤美香さん・西城江津子さん、七十七銀行女川支店の田村孝行・弘美さんご夫妻さんには何度か現地で直接お会いして、お話を伺うことができました。「令和元年東日本台風」で大きな被害を受けた長野県佐久市の柳田清二市長にも御礼申し上げます。関東山地の登山道の被害を視察するために現地へ行く前日に、突然のように面会を申し出たにもかかわらず、快く了承いただき、色々とお話を伺うことができました。

日本気象予報士会の皆様には、山岳気象や「令和元年東日本台風」の研究にあたり、様々な観点からご助言をいただきましたことに感謝いたします。特に、顧問の木村龍治先生(日本気象予報士会初代会長・東京大学名誉教授)には何度か非常に有意義なご助言をいただきまして、本当にありがとうございました。2021年2月の研究成果発表会の筆者の発表後のご講評の時の、木村龍治先生の溢れんばかりの笑顔は一生忘れません。

筆者が事故を起こしてしまった当時の名古屋大学ワンダーフォーゲル部のメンバーには心から感謝いたします。あの事故の後で色々とサポートしてもらえたからこそ、今の筆者の活動があり、その結果として本書を発刊することができました。不器用な筆者からの39年越しの改めての感謝です。遅くなってしまい大変申し訳ありません。

おわりに

恩師である岐阜大学の吉野純先生には本当にお世話になりました。先生の研究室に押しかけてお話しさせていただいた、山岳防災のために山岳気象を研究したいという筆者の思いを、快く受け止めていただきました。そして、2019年10月から2年間にわたり先生の研究生としてご指導をいただけることになりました。本年10月からは研究生ではなくなりますが、遭難事故がなくなる限り、山岳防災活動・山岳気象研究は継続していきたいと思います。引き続き、ご助言などを賜われれば幸いです。

末尾になりましたが、ヤマケイオンラインのコラム記事を採用して、本書を執筆させていただいた山と溪谷社の方々には色々とお世話になりました。そして筆者を陰から支えてくれた家族にも感謝したいと思います。

2021年8月

大矢康裕